

The Kamenori Community かめのりコミュニティ

公益財団法人 かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

 公益財団法人
かめのり財団
Kamenori The Kamenori Foundation

2019年11月 No.32

にほんご人フォーラム 2019



今号の内容

- ◇ 大学院留学アジア奨学生 夏の研修交流会 in 函館
- ◇ にほんご人フォーラム 2019
- ◇ かめのりスクール 2019
- ◇ 高校生カンボジアスタディツアー
- ◇ 講演会
- ◇ 高校生短期交流プログラム

今年はOGの尹一喜が参加してくれました

大学院留学アジア奨学生 夏の研修交流会 in 函館

(公財)かめのり財団では、アジアから日本の大学院へ留学している大学院生を選抜し、奨学生として支援しています。その奨学生たちの研究の進捗発表と相互交流の促進を目的とする夏の研修交流会を今年は北海道函館市にて、2019年9月9日(月)～11日(水)に行いました。異分野の研究を互いに発表し意見交換をし、寝食を共にすることで、絆と知識を深める機会となりました。今年はOG1名が参加し、現役奨学生を激励しました。



詳細は次ページにてご紹介します。

大学院留学アジア奨学生 夏の研修交流会 in 函館

出発日には台風が関東を直撃し、一部の参加者の旅程を急遽変更するなど波乱の幕あけとなりましたが、奨学生同士の素晴らしい連帯感もあり充実した研修交流会となりました。初日には(一財)北海道国際交流センター専務理事の池田誠氏をゲストに迎え、函館や北海道国際交流センターの歴史や活動についてお話いただき、訪問地への理解を深めました。2日目は現役奨学生8名の研究発表、OGの尹一喜や事務局長による特別講義を行いました。今年は発表の順番に趣向を凝らした結果、初参加の新生もすぐに場に溶け込めたようです。専門分野にかかわらず、どの研究発表のあとも活発に質問が飛び交い、互いに良い刺激を与え合いました。研修のあとは、函館山からの夜景を楽しんだり、最終日は五稜郭タワーやトラピスチヌ修道院など観光名所を回り函館を堪能しました。

学びの時間も、交流の時間も常に和気あいあいと団結する奨学生たちの姿がとても印象に残る夏の研修交流会でした。



ゲストによる函館のはなし



丸1日研修に集中

「大切なキズナ、かめのりファミリーと過ごした夏の終わり」

文：趙 沼振(チョ ソジン 東京外国語大学)

かめのり財団の奨学生として最後の3年目ですから、今年度の夏の研修交流会はとても楽しみにしておりました。北海道の函館に行ったら、新鮮な海の幸を味わうことから夜景の名所を観ることまで、わくわくしてたまらなかったのです。あいにく出発日の9月9日は、台風が関東を直撃した翌朝でしたので、研修交流会に行けなくなるのではないかと大変心配しました。天気と交通機関が原因となり、1日目の日程はスムーズには行かず、かめのりファミリーの皆が無事に函館に向うことに重点をおきました。家から東京駅まで3時間かかり、東京駅から函館まで4時間かかって、ようやく着いた時には疲れていましたが、最後の夏の研修交流会が無事に開始されてホッとした気分もありました。

3年目の夏、かめのりファミリーと一緒に過ごした時間は、大切な思い出になりました。なぜなら、奨学生の仲間たち全員で話し合いながら、絶え間なく交流をしたからです。韓国から来た私が、かめのりファミリーの一員になり、中国・ベトナム・カンボジア・タイから来た仲間たちと、お互いの研究発表を共有したうえで意見を交換しました。また、みんなで函館の夜景に感激したり、笑いながら写真をたくさん撮ったりしました。同期の楊さんは、言っていました、「みんな揃って一緒に楽しんで、ほんとにいいよね」。私たちは、2日目を一日中、研究報告をしたにもかかわらず、ワイワイしながら西田先生とユン先輩と夕ご飯を食べて、夜景も見に行き、そして夜遅くまでホテルの部屋で集まって延々とおしゃべりをしました。3日目はバスツアーに行っても、私たちは全く疲れを見せることなく、最後まで存分に楽しみました。

博士後期課程の3年目で、論文執筆などでストレスが溜まり煩わしい日々が続いた今年でしたが、この夏の末、かめのりファミリーと大切な思い出をつくることができ、癒されました。



夜景の前で同期たちと(筆者中央)

「研究も遊びもみんなで」

文：グエン フォン バオ チャウ(一橋大学)

9月9日から11日まで函館で夏の研修交流会が行われました。

出発の日は、台風の影響で予定通りに出発できず、結局1日を移動に使ってしまいました。私は最後に到着することになってしまいましたが、先に到着したメンバーが発表時間を組み直してくれて、とても感謝しています。

そのおかげで2日目は全員が無事発表をできました。大学院生としてそれぞれ違う研究分野ですが、どの発表も分かりやすく、質疑応答の時間では多くの質問や意見があり、有意義な研修交流会になったと思います。私は4月に新奨学生を迎えた時からタイのジェットさんのマンホールについての研究が気になっていましたが、今回の研修交流会でようやく質問することができました。他のみんなもジェットさんの研究を非常に興味深く感じたようで、函館を観光する時、宝探しのようにはマンホールを見つけては写真を撮りました。

発表が終わると、みんなで函館を楽しみました。2日目の夜は夜景を見に行き、話題が尽きず深夜までホテルで話しました。3日目は観光バスで函館をまわりました。自由時間もたくさんありましたが、いつもメンバー全員が一緒に行動し、新奨学生がうまく馴染み、楽しくしている様子を見るとかめのりファミリーの絆がますます深まるように感じました。



五稜郭タワーにて(筆者後列右から2番目)



新幹線にて函館へ



みんなでマンホールを探す



トラピスチヌ修道院にて

にほんご人フォーラム 2019 ベトナム [Japanese Speakers' Forum 2019 in Vietnam]

ASEAN 5カ国（インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア）の中等教育機関で日本語を教えている教師と日本語を勉強している高校生、そして日本の高校生が、ともに学び交流する「にほんご人フォーラム」。今年も（独）国際交流基金との共催で、「ふるさと」をテーマにダナンで8月2日（金）から8月9日（金）まで開催され、日本からは4名の高校生が参加しました。

生徒プログラム

「ふるさと」、これが今回のにほんご人フォーラム生徒プログラムのテーマでした。ふるさと＝自分が拠って立つはじまりの場所を見つめ直すことを通して参加生徒が自分自身を知り、にほんご人として自分を、そして他者を尊重できるようにしてもらいたいと考えたからです。

参加生24名は6カ国6人の多国籍グループとなり、事前課題である家族や友人へのインタビューを共有し合い、ホイアンでのフィールドワーク、にほんご人の先輩との交流等の活動に取り組みました。これらの準備・実施・まとめの全ての過程で、母語の違うメンバー同士、意見を伝え合い、方向性を決めていくのは困難もありましたが、生徒は毎日にチームワークを向上させ、最後はそれぞれのグループが考えた「ふるさと」を日本語の劇にまとめ上げ、堂々と上演することができました。この各活動を通して、文化の違いを受け入れること、コミュニケーションとは何かを学び、勇気や自信、そし

て新たな「ふるさと」とも言える友情を得たようです。生徒の活動をサポートした9名のベトナム人教師にもまた、ファシリテートとは何か、チームワークの大切さ、生徒を信じること等、多くの学びがありました。今回のプログラムで得たものを足掛かりに、参加者の一人一人がより広い世界へと羽ばたいていくことを願っています。

報告：前・国際交流基金ベトナム日本文化交流センター
日本語専門家 中尾菜穂



「ふるさと」とは何か議論

日本の高校生参加者



ホイアンでのフィールドワーク



教師プログラムの様子



教師プログラム

今回のにほんご人フォーラムの教師プログラムは「はじまりの場所」をテーマとし、プログラムを3つの「はじまりの場所」になるように考えました。1つ目はこれから生きる若者たちに必要な能力、「21世紀型スキル」を育てるにほんご人フォーラムの目的、2つ目は教科書を使った授業を考える授業の基本、3つ目は生徒を見て、気づいたことを伝える教育の原点です。

この3つの「はじまりの場所」を考えるため、参加教師11名は21世紀型スキルとは具体的に何なのかを生徒を観察して発見し、21世紀型スキルとは何かを話し合い、劇を制作して、なぜ21世紀型スキルがこれからの社会に必要なのかを生徒に伝えました。そして、観察で発見した参加した生徒一人一人の努力と長所をメッセージカードに書いて手渡しました。授業実践の面でも、これまで実施した授業活動の中で21世紀型スキルを育成する活動を紹介して

改善案を検討しました。そして、それを修正したうえで、新たな授業活動を考えました。ここで考えた授業活動は、事後課題として参加教師が帰国後それぞれの授業で実践することになっています。

参加教師は積極的にプログラムに参加し、互いに大いに刺激を受けたようです。今回のにほんご人フォーラムが参加教師の新しい「はじまりの場所」になったことを期待しています。

報告：前・国際交流基金ベトナム日本文化交流センター
日本語専門家 黒田朋斎

日本語劇のプロット制作



日本語劇発表会



ホイアン集合写真



発声練習



劇の後の懇親会

かめのりスクール 2019

2019年7月20日(土)から30日(火)の10日間、かめのりスクール2019が開催されました。アジア6カ国の12人の高校生と18人の日本人中高生が、①コミュニケーション能力を伸ばす、②グループ活動を通して、深く考える力、創造する力を伸ばす、③異なる文化を持つ人との交流を楽しむを目標として、助け合って課題に取り組み、友情を育みました。プログラム前半では来日したアジアからの高校生が様々な文化体験をしたのち、2泊3日のホームステイで日本の家庭生活を体験。後半の7月26日(金)から29日(月)は日本人中高生と御殿場で合流し、全員で「つたえる・つたわる」をテーマに様々な活動を行いました。

アジアの高校生の声

(原文のまま)

文：アイン コク グエン(ベトナム)

私にとってかめのりスクールは忘れられない思い出になりました。今年の7月私はかめのりの参加者として選ばれました。初めて日本に行くのですから、とても楽しみでした。毎日、食べるときにも、寝るときにも、勉強するときにも、このことについて考えてしまいました。やっと出発日が来ました。ベトナムの空港にいる時から日本に着くまで色々な悩んだことがありました。日本になれるか、みんなと話せるか、友達ができるか、とても心配しました。でもかめのりのみなさんに会ったら、その心配は全部消えました。アジアの生徒と大学のスタッフはみんなは親しいし、優しいし、とても素晴らしいです。最初から温かさが感じられました。空港で集合したら、ホテルに向かって、新しいjourneyを覚悟しました。今回私のルームメイトは韓国からのジョウさんです。最初私たちあまり話合わなかったですけど、1日よくしゃべって、親友になりました。毎晩他の部屋に行って、みんなと一緒に話したり、ゲームをしたり、歌ったりして、とても楽しかったです。

かめのりスクールに参加する時、色々な友達ができるだけではなく、有名なところにたくさん行くこともできます。私にとって、それぞれの場所に、特別な気持ちを感じられました。明治神宮には自然の中にいるという感じができたとか、江戸東京博物館には古さと新しさの美しさを感じられました。藤子F不二雄ミュージアムにはアニメの素晴らしさを感じられましたなどです。毎回そのところから戻る時、日本のことへの好奇心はもっと大きくなりました。いろいろなところに行けるだけではなく、面白い文化も体験できました。和太鼓とか茶道とか歌舞伎などです。チャンスがあればもう一度その文化をやりたいと思います。

かめのりスクールのことは全部とても素晴らしいです。でも私にとって、その中でも一番素晴らしいのは日本人と一緒に勉強したり、

生活したりすることです。とても優しいホストファミリーと生活しました。みんなというのは自分の家族というみたいだったです。さらに日本人の生徒と一緒に勉強したり、話したりして、とても嬉しかったです。時々、日本人生徒は早すぎて、みんな何を言うか分からないこともあるけど、それは大変な問題というわけではない。

かめのりスクールを通じて、貴重なことをたくさん得ました。友達ができたり、critical thinkingとかteam workなどのような大切な力を学んだし…かめのりが終わって、もう1カ月ですが、今でもいつもみんなが懐かしいです。たとえ誰か「一番言いたいことはなんですか」と聞けば、ためらわず「かめのり、本当にありがとうございました」と返します。

文：イ・マデ・トゥグー マヘンドラ(インドネシア)

とてもあっという間に感じた10日間でした。短い期間でしたが、ただ遊ぶということだけではなく、色々な活動を通じて数えきれないほど沢山のことを学びました。もちろん、それらの活動に参加していたときに大変なことがある、その大変なことはどう乗り越えられるようになるのか、そして楽しくするためにはしっかり相手の意見や気持ちを尊重したり、お互いに認め合ったり支え合ったり思いやり合ったりするというのはこのかめのりスクールに参加して強く自分に伝わりました。

学校では勉強し得ないことをたくさん勉強し、コミュニケーションがより良く取れるようになり、日本の文化に触れることができ他のアジアの国々からのお友達がたくさんできて自分の視野をより広がって本当に良かったなと思っています。このプログラムに参加させていただいて心から感謝を申し上げます。



文化体験の和太鼓



藤子・F・ミュージアム



文化体験の茶道



すぐに打ち解ける生徒たち



ディスカッション形式の授業



発表に向けアイデアを広げます



キャンプファイヤー



様々なアクティビティを通して「私たちアジア」と実感



「アジアの旗」を制作



スキット発表会

文：張 詩悦(中国)

この夏休み、かめのりスクールのおかげで、ずっと憧れていた日本へ行きました。親切で、優しい皆さんと出会って、色々学びました。

かめのりスクールは若い人達の交流のために行われていますが、話すのが苦手な私とその目標を達成できるかどうか、不安いっぱいでした。初めて空港でインドネシアから日本語がペラペラ話せるキュウさんを見ると、彼女が日本人だと思いました。皆さんと前から知り合っているように、笑いながら、おしゃべりをしていました。無口な私と比べて、キュウさんはたくさん話をしてくれたと思いました。昼ごはんを食べる時、キュウさんと一緒に座って、彼女はどのように話すことが上手なのか知らなかったです。「なぜって、せっかくのチャンスだから、何も言わず帰れば後悔するよ」とキュウさんが言いました。私もそう思いました。このプログラムをきっかけに、日本語能力を高めたいと思っています。その後、一緒に座るクラスメイトにこえをかけ、学校などについ

ても少し聞いてみようと思いました。意外とみんな喜んで詳しく説明してくれました。

異文化に触れていて、違う言葉を使っているみなさんと東京で見学していた時、何度もまるで夢みたいな感じがしました。色々なところが違いますが、同じなのは皆さんの体から心まで一緒にいたことです。いつでも「大丈夫?」という声が耳に入ってきました。初めて、「張ちゃん」と呼ばれた時、びっくりして、いつも「張さん」と呼ばれていた私にはとても思いがけなかったんです。話すことが苦手な私もだんだん自分の気持ちなど伝えられるようになってきました。楽しい時間がいつも速すぎるということは誰でも知っていますが、皆さんは今持っているすべてを大事にするということを教えてくれました。私もどうしても、こういう気持ちを心に刻んでいきたいです。

日本で出会った人々と日本のにぎやかさと静かさは、心の中の一番美しい風景になりました。皆さんが言ったとおり、『日本で皆さんと出会って、よかったなあ。じゃ、また逢う日まで』。

日本人中高生の声

■ 創意工夫をしてグループの成果物を生み出すことが一番面白かった。自分のアイデアを仲間が改善する、それをまた別の人が改善する、というように皆の発想の積み重ねをしていく過程が楽しかった。

■ 普段の学校では同じような話し合いをしてもすぐに話が尽きて雑談になってしまうが、このプログラムの話し合いではとにかく話が盛り上がり、楽しかった。レベルの高い話し合いをできる人がこんなにいっぱいいるんだ、と思った。

■ 自分の頭の中で分かっている、それを皆に伝えようとなるとすごく難しいことや、自分のあたり前が皆のあたり前でないことを発見した。

■ コミュニケーションは複雑な構造になっていることを学んだ。視覚、聴覚、感情、そのほかたくさんの要素によって成り立っていて、それを私たちは普段何気なく使っていたことを感じた。

■ 英語ではゆっくり話せるのに、母語である日本語ではそれが案外難しいということを発見した。

■ アジアの国々についてもっと知りたくなった。

■ アジアの他の国の人ならではの斬新なアイデアが出てきておもしろかった。

第6回高校生カンボジアスタディツアー

2019年7月30日(火)～8月6日(火)、当財団と(公社)日本ユネスコ協会連盟との共催による「第6回高校生カンボジアスタディツアー」が実施されました。全国から選抜された10名の高校生は、現地の人々との交流を深めながら、民間レベルでの国際協力を体験することで、今後の国際社会、地域社会に貢献する力を育みました。

トゥールスレン博物館視察

家庭訪問でカンボジアの家事体験



アンコールワットでの集合写真



寺子屋(復学支援クラス)視察

寺子屋の子どもたちと交流

参加した10名の生徒のその日の感想からこのツアーを振り返ってみましょう。(一部抜粋)

1日目 事前研修・学習発表

『いかに貴重な体験をするかではなく、いかにそれを自分の学びに変えていくのかということが大切だということ。そして、ここに集まったメンバーはそれができる人たち、そしてその重要性に気がつき、努めている人たちののだと思いました。』

2日目 成田空港→プノンペン空港

『異文化と出会った時にはその人となりが出る。だから常に自分を磨いていかなければならない。』『好きになることが分かち合うことの第一歩だ。』

3日目 在カンボジア日本大使館、UNESCO プノンペン事務所表敬訪問、トゥールスレン博物館 等

『国全体は一度間違った方向を向くと黒い歴史を歩んでしまうことが分かり、一人一人の意見の重大さを実感しました。』『過去の出来事を変えることもできないし、殺された人々は助けることもできない。でも、もう二度とこのようなことが起こってはいけないう気持ちはずなげられると思う。』『日本では当たり前の命。しかし、その当たり前の命は

当たり前になる質の高い教育によって守られていること、そして教育によって地域の宝やアイデンティティも守られていることを知りました。』

4日目 キリングフィールド 等

『虐殺や戦争は、その悲しみが何世紀にも渡って人々の心に深く痛く爪痕を残します。二度とこんなことが起こらないするにはどうすればいいのか、私が一生苦しんで考える課題となりそうです。』

5日目 日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所・寺子屋視察、家庭訪問

『自分は当たり前で教育を受けているので、普通の教育がどれだけ大切なことなのかを忘れていた気がした。学ぶということの重要性を知り、自分自身の取り組みを振り返るきっかけになった。』『寺子屋(※復学支援クラス)が勉強だけでなく、経済的自立のための支援の場となっていることを知り、改めて寺子屋が果たしている役割の重要性を感じた。』『未来に向かって学んでいる姿を見て圧倒させられた。僕たちは果たしてこのように勉強しているだろうか。未来に向かって進んでいるのだろうか。』『カンボジアには経済じゃ推し量れない宝がある!』

※復学支援クラス…中途退学児童生徒向けのクラス

6日目 アンコールワット訪問 等

『この旅で、人々の温かさ、優しさに触れることができ、自分も優しい気持ちになることができました。心の豊かさって何よりも大切だと感じられました。』

7日目 世界遺産事業「塗り絵プロジェクト」参加

『本当に楽しく多くのことを学び、密度の濃い時間を過ごすことができた。』

8日目 帰国

生徒にとって、その後の人生を変えるかもしれないほど貴重な体験となったこのスタディツアー。彼らの今後の活躍が大いに期待されます。

本プログラムの実施に当たり、支えていただいた全ての皆様に感謝申し上げます。

報告：都城ユネスコ協会事務局長 有里泰徳



世界遺産事業「塗り絵プロジェクト」に参加

講演会

当財団では、アジアの国々との相互理解の促進やグローバル人材の育成を目的とした講演会の支援をしています。その一環として2018年12月には、ベトナムのホーチミン市国家大学人文社会科学大学で、日本語を教えている教師たちを対象に、「ベトナムの日本語教育向上のためのアクティブ・ラーニングについて」の講演会を開催。また2019年6月には福井県立武生東高校で全校生徒を対象に、翌日には中学3年生の保護者約200名を対象に、「21世紀社会を生き抜くための能力・資質等」について語っていただきました。いずれも講師はカリフォルニア大学サンディエゴ校教授の當作靖彦氏。米国における日本語教育の第一人者であり、グローバル政策戦略大学院外国語プログラムディレクターなど、幅広くご活躍中です。

「アクティブ・ラーニングが目指すこと」

2018年12月11日

近年ベトナムにおける外国語教育において学習者の思考力の向上を目指しているため、「アクティブ・ラーニング」が重要なキーワードとしてよく取り上げられています。それを背景に、2016年からホーチミン市師範大学でカリフォルニア大学サンディエゴ校の當作靖彦教授が中心のアクティブ・ラーニングの研修やシンポジウムを毎年開催しています。その定期的な研修とシンポジウムの開催により、アクティブ・ラーニングが広く知られており、アクティブ・ラーニングを実施しようとしている学校もいくつかありました。

しかしながら、実際には當作先生が指摘したように、アクティブ・ラーニングの本質をよく理解せず、学生に何かをさせていけばアクティブ・ラーニングであると考え、目的もはっきりしないまま学生に活動させることも少なくありません。また「ベトナムではアク

ティブ・ラーニングの実施が難しい」、「初級の学習者には実施できない」等の意見も多かったです。本当のアクティブ・ラーニングを実施していくためには、研修を重ね、現場に携わる先生にアクティブ・ラーニングの本質や理念をより深く理解してもらわなければならないと考え、2018年12月にベトナム日本語・日本語教育学会が主催の財団と国際交流基金の支援の下で、第一回日本研究・日本語教育ワークショップを開催しました。ワークショップにおいて、當作先生に「アクティブ・ラーニングのめざすことー『能動的にさせる』から『能動的になる』へ」というテーマでアクティブ・ラーニングの概念、理論の基礎、学習効果等の基調講演をしていただきました。それを通じて、一見アクティブ・ラーニングを使っているようで、教師中心で、学生が自分の思うこと、考えることを表現する

ものではない授業がよくあり、教科書に書いたものを機械的に繰り返しているだけでは、実践能力が身に付かないと分かりました。

「能動的にさせる」から「能動的になる」が大切なキーワードで、アクティブ・ラーニングを使って、考える学生を育成していくことが今後の課題でしょう。

報告：ハノイ国家大学外国語学日本語文化学部長
ベトナム日本語・日本語教育学会会長
ダオ・ティ・ガア・ミー



「破壊的イノベーション時代を生きるための7つの能力・資質と将来設計」

2019年6月21日・22日

本校では昨年より「グローバル人材育成プロジェクト」と呼ぶ企画を行っていますが、今年度はそのメイン事業として、「かめのり財団」の多大なるご支援を賜り、カリフォルニア大学の當作靖彦教授を招聘することができました。二度とない機会であることから、本校生徒対象と中学3年生保護者対象の2本立てをお願いし、ともに「21世紀を生きる若者に求められる能力・資質・態度とは何か」という視点からお話をいただきました。

21世紀はグローバル化の時代とよくいわれますが、先生は21世紀をテクノロジー主導で社会が変わっていく「破壊的イノベーションの時代」と位置づけられ、さらにそうした社会は予測がつかないことから、「※VUCAワールド」と特徴づけられました。先生は、

この抽象的な内容について具体的事例を次々と取り上げながら説明され、さらにAIと人間との違いにも言及されました。生徒も保護者も21世紀という時代をより鮮明にイメージできたと思います。この理解の上に、従来の20世紀型教育が通用しないこと、新しい21世紀型の、すなわちVUCAワールドで生き抜く人間を育てることこそがこれからの教育の使命であると強調されました。

また先生は、想像力、多様性の尊重、共感力、高度の思考力など7つのソフトスキルを指摘され、さらに成長型マインドセットの重要性を説かれました。これらは新学習指導要領にも通じるものであり、現在、本校でも進めつつある授業改革の方向性を再確認することができたと同時に、改めて教育に携わる

者としてその使命の重さを再認識させられました。

最後になりますが、このような示唆に富む貴重なご講演を聞く機会をお与えくださった「かめのり財団」に厚く御礼申し上げます。

報告：武生東高等学校 教頭 山崎良成



※「VUCAワールド」：Volatility(不安定)、Uncertainty(不確定)、Complexity(複雑)、Ambiguity(曖昧)の頭文字をとった造語

高校生短期交流プログラム

(公財)YFU日本国際交流財団と共に実施する事業として、夏休みの約1カ月間、日本の高校生10名が韓国を訪問。ホームステイをしながら、現地の高校にも通うという貴重な体験をしました。今年は日韓情勢が悪化する中での訪韓だけに、不安を抱えながらの出発でしたが、ホストファミリーはもちろん、現地の高校生や町の人々にも「とても親切にもらった」「韓国が好きになった!」というのが参加者の実感でした。その韓国での体験についてご紹介しましょう。

■ 私の行った高校は実業的なことを学ぶ高校で、1学年200名のうち130名は就職すること。でも、いい就職先を選ぶにはいい成績をとらなければ、就職組も頑張らなくて勉強をしています。だから部活はほぼないと思っていましたが、生徒が主体となって、チアリーディング、ドッジボール、演劇、日本語、英語、製パン製菓などなど多くの子が掛け持ちで楽しんでいました。

■ 韓国の高校生の学習状況を調べてみました。1年生でもほとんどの生徒が週4～5日、各4時間くらいは塾に通っていて、2、3年生になると通っていない人は0に近いそう。塾の終わるのが22～23時なので、ほぼ一日中勉強しているわけ。私にはとてもいい刺激となりました。

■ もともと韓国ブランドの服が好きなので、韓国の高校の制服にも興味がありました。が、基本の制服をきちんと着ている子はほとんどおらず、スカート丈も短い。メイクやピアスの子もいます。やることはしっかりやるからこそスタイルは自由なんだなと思いました。

■ 韓国語が得意ではない私は英語で話すのですが、韓国のたいていの人は流ちょうな英語で答えてくれます。その英語力の秘訣は・・・?

韓国では2005年に国の方針として「英語教育活性化」をかかげ、2008年からは初等学校1年生から英語を始めています。そして、大学入学のための全国共通試験でも英語は重要視され、民間企業でも就職や昇進に際して英語力がついて回ります。というのも、日本の貿易依存度は約30%ですが、人口の少ない韓国では貿易依存度が約80%。韓国経済は対外貿易に圧倒的に依存しているのです。私も英語力を高め、多くの経験を積んで自分を磨き、グローバルな人間になりたいと思いました。

■ 私はもともと韓国語会話を勉強しています。韓国語は世界で唯一日本語と文法が同じであり、ハングル文字は世界で一番合理的な仕組みの文字とされています。ただし、日本と同様に「敬語」の種類が多く、日本よりも上下関係は厳しいので、今回も敬語の使い分けにチャレンジ! 具体的にいろいろと学びました。

■ 韓国ではたくさんの人に出会い、たくさんのところにいき、いろいろな体験をしましたが、一番印象に残っているのが学校で過ごした1週間です。自己紹介のとき、韓国語はできないので英語で話しました。みんなも英語で話しかけてくれましたが、外国語同士では十分なコミュニケーションができないなと悩んでいると



昌徳宮(チャンドククン)にて



チアリーディングの練習

き、クラス対抗サッカーがありフル出場できました。それからは他のクラスの生徒まで話しかけてくれて、最終日はクラスのみんでケーキとお菓子、寄せ書きをプレゼントしてくれました。この韓国体験で一生の友達を作ることができ、ホストファミリーとの関係もずっと続けたいと思います。

今後の予定 (2020年)

- 1月 かめのりフォーラム 2020 / かめのりセッション 2020 /
かめのり中高生アンバサダープログラム (フィリピン派遣)
- 2月 かめのりカレッジ 2020

発行人 / 西田 浩子 編集 / 悠プランニング、堀井 玲子 デザイン / イワチサトシ (BUTI design) 印刷 / 佐伯印刷株式会社



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します!

公益財団法人 **かめのり財団** The Kamenori Foundation

〒102-0083 東京都千代田区麴町5-5 ベルビュー麴町1階

TEL : 03-3234-1694

FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp

URL : http://www.kamenori.jp/